

平成 7 年度研究功労賞

受賞対象者 大熊 輝雄 先生

大熊輝雄先生は、わが国精神医学の泰斗のひとり大熊泰治先生のご長男として大正 15 年岡山でお生れになり、ご尊父の北海道大学医学部教授御就任にともない札幌にお移りになり、庁立小樽中学校を 4 年で終了、ついで第一高等学校を 2 年で卒業、昭和 24 年すなわち 24 歳で東京大学医学部医学科を卒業されました。若き日の先生の英才ぶりを物語るご経歴の一端であります。

大熊先生は今日までの 45 年間、主に臨床神経生理学的立場から、精神障害の成因、病態の解明、治療法の開発について、優れた研究業績を挙げて来られました。先生の御業績は、精神医学全般にわたる研究をはじめとして、精神分裂病、感情障害の精神生理学的研究、精神薬理学的研究、睡眠研究、そしててんかん学ならびに臨床脳波学研究と広く渉り、研究論文はおよそ 300 編にも上ります。このうち脳波学およびてんかん学に関する先生の御業績の系譜は、つぎのようであります。

先生は昭和 25 年東京大学医学部精神医学教室に入局、大学院特別研究生となり、28 年に同大学院を終了、この間に、「ヒトの大脳皮質および皮質下部の脳波」に関する研究を行い、邦文ならびに英文の原著論文を發表されました。この研究はわが国における深部脳波研究の鵬矢をなすものであり、同じ頃みすず書房から出された異常心理学講座「意識の生物学的基礎」とともに、神経精神医学を志さず当時の若い学徒に深い感銘を与えたのであります。

昭和 33 年から 2 年間、大熊先生はアメリカ合衆国 UCLA 脳研究所に留学、ついでマサチューセッツ総合病院に移られ、意識およびてんかんの神経生理学的研究に従事されました。ご帰国後昭和 41 年に鳥取大学教授に就任され、ポリグラフィによるヒトの睡眠研究と夢の研究に着手されました。脳波のてんかん性発作発射の日内変動に関する研究とともに、抗てんかん薬カルバマゼピンが双極性感情障害に対し、炭酸リチウムに匹敵する躁状態治療効果ならびに病相の反復予防効果を持つ事実を、大規模な比較試験を行い実証されました。後にバルプロ酸にも同じ効果があることが判り、今日云う気分安定剤という一つのカテゴリーの発端を作られたのであります。

大熊先生は昭和 49 年東北大学にお移りになり、精神医学講座、大学院医学研究科を担当し、同学付属病院神経科精神科長を併任されました。この間に先生は「てんかんの長期予後に関する多施設共同研究」を組織し、てんかん初発後 5-10 年以上の経過を監察し得た 20 施設の計 1868 例における 3 年以上の発作完全寛解率は 58%であり、抗てんかん薬の開発とともに、発作予後ひいては精神医学・社会的予後が改善している事実を示されました。大熊・熊代共著でエPILEPSIA誌に發表されたこの論文は、今日も国際的に広く引用されて

います。また大熊先生は「抗てんかん薬の催奇形性について一全国 11 施設の共同研究」を組織し、服薬妊娠出産 657 例の奇形児数が 6.68%であったことを明らかにされました。抗てんかん薬リスクに関する多施設共同研究の先がけをなす御業績であります。大熊先生は、昭和 60 年国立武蔵療養所に転任、61 年国立精神・神経センター設立とともに武蔵病院長、平成 4 年同センター総長に昇任されました。先生は日本精神神経学会をはじめ国内外の数多くの関連学会の要職に就かれ、日本てんかん学会では研究会として発足した昭和 42 年以來の理事を努められ、学会機関誌「てんかん研究」の発刊に際し、編集委員長の大役を果たされました。日本てんかん学会は先生のご功績を称えて平成 6 年、名誉会員にご推薦申し上げます。また先生は同年、日本学術会議第 7 部内科系科学精神医学部門の第 16 期会員に推薦され、当選されました。大熊先生は平成 6 年 3 月に精神・神経センター総長を定年退官された後にも、同センター名誉総長をはじめ数多くの要職に就かれるかたわら、大熊クリニックを主宰し、過去半世紀にわたる精神神経学のご造詣を、広く患者に還元する日々を送っていらっしゃいます。臨床てんかん学は、精神医学と神経学のはざまに在るグレイ・ゾーンであります。日本のてんかん学の発展にとって、大熊輝雄先生が精神神経学、なかんずく臨床神経生理掌で果たされたご功績は偉大であり、日本の臨床てんかん学の歴史に永く残ると信ずるのであります。

(清野昌一記)